

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第8号

2019. 2. 20 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-299-3107

札幌 冬の風物詩

来る日も来る日も真冬日、積雪量も一番多くなるこの時期の北海道は、1年で最も寒い季節です。そんな厳しい寒さの中、今年も「さっぽろ雪まつり」が開催されました。今回が70回目の開催といますから、地元民としても、その歴史の長さには少し驚いてしまいます。

1950年、地元の中・高校生が6つの雪像を大通り公園に設置したことをきっかけに、雪まつりは始まったのだそうです。（さっぽろ雪まつり公式サイトより）以降、毎年開催されるようになり、札幌の冬の行事として市民に定着していきました。雪国で暮らす人々にと



今年作られた大雪像の一つ（大通り公園より）

っては厄介物でしかない雪を利用して、まるで芸術作品のように作り上げられた大雪像の数々は、まさに圧巻の一言に尽きます。そしてその規模を年々拡大し続け、70年という歴史を刻んできたのです。今では世界中で認知されるまでになり、日本国内からはもちろん、多くの外国人観光客が訪れるようになりました。今年の雪まつり期間中は、北海道の気象観測史上最大の寒波が流れ込み、札幌でも一日の最高気温がマイナス10度以下という極寒の日が続きました。それにも関わら

ず、来場者は史上最高の270万人以上だったといます。

昨年9月、北海道は大地震に襲われ、各地で甚大な被害が出ました。それからわずか五ヶ月、まるでそんな事は無かったかのように、例年通りこのような大きな行事を開催させることに、人間の逞しさを感じます。そして、会場でとびきりの笑顔ではしゃぐ子供たちや、雪像にカメラを向ける観光客の人たちを見て、このお祭りが「平和の象徴」として、今後も続いてくれることを願ってやみません。



ちなみに横の写真は、サンレジデンス管理棟の一つ、サクシーズ中の島の入り口付近です。除雪した雪を使って、入居者が大きな雪だるまを作ってくれました。これもまた、平和な日常の一場面です。

目を背け続ける社会

11人もの犠牲者を出した、札幌市の困窮者支援住宅の火災事故から1年が経過しました。この間、社会は何かを学んだのでしょうか。マスコミでは当時、法的位置づけのない施設という言葉がよく使われました。しかし私は思います。施設がどうこうなんてどうでもいい話なのです。そんな施設でしか生活できない人たちが何故いなくならないのか、そこから目を背け続ける限り、そんな困窮者が今後も増え続けることになる、それこそが根本的な問題なのです。

身内が身内を支えきれない低所得者が激増しているのは、誰の目から見ても明らかです。違う言い方をすれば、貧富の格差が恐ろしいほどのスピードで進んでいるということです。強者と弱者がはっきりと区分され、弱者は隅に追いやられていく、今の社会はそんな構図になっているように思います。こんなことを言うと批判されるかも知れませんが、国が新たな困窮者をどんどん作り上げている、そんなことさえ考えます。支援活動を行う私たちのもとには、途切れることなく相談者が訪れます。そんな彼らを毎日のように目の当たりにすると、日本はもう崩壊が始まっているのではと、私は実感として思ってしまうのです。

つい先日、サンレジデンスでおよそ5年間生活をしていた高齢の女性入居者が、自宅で亡くなりました。詳しい原因ははっきりしていませんが、病死だと思われます。この女性は、軽い知的障害のある息子さんの面倒を見ながら、2人きりで世帯保護を受け、ひっそりと、まるで世間から隠れるように暮らしていました。母親と息子、2人でホームレスになったところでたまたま私たちと繋がり、生活の場所を見つけた彼女たちは、むしろ幸運であったのかも知れません。しかしこの親子について考えるとき、日本社会における困窮

者問題の原点が見えてくる気がします。

一人きりになってしまった息子さんは、単独での生活は難しく、今後生活サポート付の施設を新たに探さなければなりません。彼のように、障害や病気で一般就労が出来ない人たちはたくさんいます。さらに、今や人口の27%以上が高齢者（65歳以上）という世の中において、貧弱な社会保障制度の上では、生活に困窮する高齢者が増え続けるであろうことは、何十年も前から予想されていたことです。それなのに何故、そんな弱い立場の人たちに寄り添う仕組み、それもより実効性のある仕組みが社会の中に出来上がっていないのか。いや、作ろうとはしているが追いついていないと言った方がいいかも知れません。これこそが問題の根幹です。では何故対策が追いつかないのでしょうか。

それは、日本の社会全体が、拡大し続ける困窮者問題に対して、「現実感」を持たないからだと思うのです。今、厚生労働省による勤労統計の不正が話題になっています。それとは直接関係しないかもしれませんが、まるで困窮者の実態をひた隠しにしているようにも感じてしまいます。

飲食店やコンビニエンス・ストアでの不適切動画の投稿、全国で頻発する悪質なあおり運転、いじめや児童虐待等々……。様々な事案が社会問題化していますが、私にはそのどれもが「幼稚」に見えて仕方ありません。そしてその背景には、想像力の欠如、さらには自己中心的なものまで透けて見えます。

綺麗ごとを言うつもりはありません。しかしながら、やはり世の中は人と人が支えあってこそ成り立つものだと思います。「負の連鎖」という言葉が聞かれるようになってどのくらいたつでしょう。弱者は永遠に弱者でいいのでしょうか……。そんなこと、いい訳がありません。

ブラックアウトから学んだこと



平成30年9月6日未明、北海道では初めて観測された震度7の巨大地震は、各地でその爪あとを残しました。特に厚真町では、大規模な崖崩れが発生し、36人もの尊い命が奪われました。心よりご冥福をお祈りいたします。

札幌市内でも震度6を観測し、かつて経験したことのない大きな

電気のありがたみを痛感させられました

揺れに、多くの人が恐怖におののきました。地震発生時、私は自宅のロフトの上で寝ていたのですが、ミサイルでも打ち込まれたのではと思うほどの衝撃に飛び起きました。まるで巨人が小さな箱を振り回しているかのような揺れかたに、一瞬頭が真っ白になったほどです。それでもようやく揺れが収まり、とにかく状況を確認しようとテレビを付けたのです。すると、ものの3分ほどです。ぱつん、という何とも情けない音と共に電源が落ちてしまいました。そうです、全道ブラックアウトの始まりです。これもまた、私たちにとってかつてない経験でした。

この停電では、色々なことに気付かされました。普段、全く意識もしないで生活していたものが、電気一つ欠けるだけで、これほどまでに機能しなくなるものかと、愕然とせざるを得ません。住宅によっては水道も使えなくなり、スーパーやコンビニには長蛇の列が出来上がりました。当たり前のように買い物することが、実はとても有難いのだと思い知り、我ながら反省したものです。



信号機も点かなくなり・・・

でも、悪いことばかりではありませんでした。それは、人はやはり協力し合えるのだと再確認も出来たことです。商品を売るお店側も電気を使えないのは一緒です。レジも打てません。在庫はコンピューター管理ですから、バーコードを通さずに商品を売れば、後々の修正作業が大変なのです。それを覚悟の上で営業してくれたこと、本当に頭が下がる思いです。

また当然のことながら、停電の影響は信号機にも及びました。地震後、管理している各棟や入居者に被害はないか確認に行くのですが、信号機が機能していない道を車で走ることがどれほど危険なものか、初めて知りました。交差点に差し掛かるたびに、他の車と衝突しないようにおそるおそる、慎重に、とにかく慎重に動かさなければなりません。私はこの停電中、全道各地で大きな交通事故が多発するだろうと危惧していました。

ところがです。そんな事故はほとんど起こらなかったのです。それどころか、進路をめぐり、ドライバー同士が怒号を飛び交わすようなシーンも一度も見ませんでした。これもまた、互いが譲り合い、協力し合った結果です。

そう、人は譲り合えるし、協力し合える、人に寄り添うことが出来る生き物です。そんな人の心にある暖かさを、やはり私は信じたいと思います。